

# 当科における平成27年度入院・手術症例の検討

高橋紗央里 福島 典之 平位 知久  
呉 奎真 有木 雅彦

## I. はじめに

平成27年度（平成27年4月1日から平成28年3月31日まで）の、耳鼻咽喉科・頭頸部外科における入院症例数、手術件数について検討を行ったので報告する。

## II. 方 法

平成27年4月1日から平成28年3月31日までに当科で入院加療を行った症例、及び入院の上手術を行った症例について入院カルテを用いて検討を行った。

## III. 入院症例

平成27年度における当科の入院症例920例の内訳を表1に示す（以下の症例数はすべて延べ人数で示す）。手術目的での入院患者が627例（68%）と最も多かった。

次に急性炎症性疾患が93例（10%）、突発性難聴などの急性感音性難聴が88例（10%）と続いていた。悪性腫瘍疾患は56例（6%）、眩暈は28例（3%）であった。Bell麻痺、Hunt症候群などの末梢性顔面神経麻痺は12例（1%）であった。

症例数の多かった急性炎症性疾患、悪性腫瘍疾患について、さらに詳細に検討した。急性炎症性疾患による

表1 平成27年度入院症例の内訳

手術目的	627
急性炎症性疾患	93
悪性腫瘍疾患	56
急性感音性難聴	88
眩暈	28
末梢性顔面神経麻痺	12
その他	16
合計	920

県立広島病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

入院患者93例の内訳を表2に示す。急性扁桃炎をはじめとして咽喉頭の炎症性疾患が49例と最も多く、急性咽喉頭炎、急性唾液腺炎、急性喉頭蓋炎と続いた。その他は耳瘻孔感染等であった。

悪性腫瘍患者56例の内訳を表3に示す。下咽頭悪性腫瘍が23例と最も多く、次に喉頭悪性腫瘍が11例、中咽頭悪性腫瘍が5例であった。

平成27年度において、当科では1,017件の手術を行った。手術部位による内訳を表4に示す。鼻副鼻腔手術が332件と最も多く、次いで鼓膜形成術、鼓室形成術、鼓膜換気チューブ留置術、顔面神経減荷術などを含む中耳手術が324件、咽頭手術が173件、頸部手術が127件と続いた。その他に耳瘻管摘出術などの外耳手術や声帯ポリープ、ポリープ様声帯、喉頭腫瘍の生検などの喉頭微細手術も行っている。

それぞれの部位別に、さらに詳細に分類したものを表5～8に示す。

中耳手術324件の疾患と術式について表5に示す。疾患別にみると、慢性滲出性中耳炎が132件と最も多く、真珠種性中耳炎が104件、慢性化膿性中耳炎が66件、耳硬化症6件と続いていた。

鼻副鼻腔手術332件の疾患と術式を表6に示す。疾患別にみると慢性副鼻腔炎（ESS）が106件、肥厚性

表2 急性炎症性疾患患者の内訳

扁桃炎・扁桃周囲膿瘍	49
急性喉頭蓋炎	3
急性咽喉頭炎	19
急性中耳炎	3
頸部膿瘍	2
急性唾液腺炎	5
その他	12
合計	93

表3 悪性腫瘍患者の内訳

喉頭腫瘍	11
上咽頭腫瘍	3
中咽頭腫瘍	5
下咽頭腫瘍	23
甲状腺腫瘍	4
鼻副鼻腔腫瘍	3
聴器腫瘍	2
唾液腺腫瘍	1
原発不明	2
悪性リンパ腫	2
合計	56

表4 平成27年度の手術件数

外耳手術	16
中耳手術	324
咽頭手術	173
鼻副鼻腔手術	332
頸部手術	127
喉頭微細手術	42
人工内耳	3
合計	1,017

表5 中耳手術の疾患と術式

疾患	術式	件数
真珠種性中耳炎	鼓室形成術	104
慢性化膿性中耳炎	鼓室形成術	66
中耳炎術後症	鼓室形成術	1
耳硬化症	アブミ骨手術	6
中耳奇形	鼓室形成術	3
顔面神経麻痺	顔面神経減荷術	2
慢性滲出性中耳炎	鼓膜チューブ挿入術	132
その他		10
合計		324

表6 鼻・副鼻腔手術の疾患と術式

疾患	術式	件数
慢性副鼻腔炎	内視鏡下鼻副鼻腔手術	106
術後性頬部嚢胞	内視鏡下鼻副鼻腔手術	3
鼻中隔彎曲症	鼻中隔矯正術	96
肥厚性鼻炎	粘膜下鼻甲介骨切除術	112
眼窩底骨折	眼窩底骨折観血の手術	4
その他		11
合計		332

表7 咽頭手術の疾患と術式

疾患	術式	件数
慢性扁桃炎など	口蓋扁桃摘出術	122
アデノイド増殖症	アデノイド切除術	45
その他		6
合計		173

鼻炎(下甲介切除術)が112件、鼻中隔彎曲症(鼻中隔矯正術)が96件であった。鼻中隔矯正術、粘膜下鼻甲介骨切除術は慢性副鼻腔炎の治療と併用もしくは単独で行った。

咽頭手術173件の内訳を表7に示す。慢性扁桃炎・病巣感染症に対して122件の口蓋扁桃摘出術が行われた。また、アデノイド増殖症に対して45件のアデノイ

表8 頸部手術の疾患と術式

疾患	術式	件数
顎下腺腫瘍、唾石症	顎下腺摘出術	4
耳下腺腫瘍	耳下腺部分切除術	17
甲状腺手術	甲状腺切除術	16
喉頭腫瘍	喉頭摘出術	1
悪性腫瘍頸部リンパ節転移	頸部郭清術	8
正中頸嚢胞	甲状舌管嚢胞摘出術	3
頸部腫瘍	リンパ節生検・頸部腫瘍生検	14
呼吸困難	気管切開術	48
嚥下障害	喉頭気管分離術	7
	喉頭挙上術	3
その他		6
合計		127

ド切除術を行った。

頸部手術は全体で127件でありその内訳を表8に示す。気管切開術が48件と最も多く、耳下腺部分切除術が17件、甲状腺切除術が16件と続いた。リンパ節・頸部腫瘍生検は14件であった。

また、日帰りでの全身麻酔手術は73例であり、鼓膜換気チューブ留置術49例、喉頭微細手術8例のほか鼓膜接着法や粉瘤切除などを行った。

#### IV. 考 察

平成27年度の耳鼻咽喉科・頭頸部外科における入院症例は920例であったが、そのうち627例(68%)が手術目的での予定入院である。入院患者数は平成26年度と比較して僅かに増加していた。平成27年4月1日より突発性難聴に対する高気圧酸素治療を開始しており、その影響もあって急性感音性難聴での入院数は平成26年度の18例から88例へと大幅に増加している。

慢性中耳炎や真珠種性中耳炎などに対する鼓室形成術は県内のみならず県外からの紹介患者数も多い。また慢性中耳炎の場合両側同時に手術することも多い。中耳炎の手術にとって重要なのは聴力の改善と耳漏の停止である。当科では外耳道削開型鼓室形成術・外耳道再建術を行っており、良好な成績を挙げている。

病診連携を中心とした紹介患者によるものが増加し、当科入院患者数の増加へ繋がっているものと考えられる。

今後も当院での症例の統計的検討を継続し、さらなる治療成績の改善に結び付けていきたい。

## V. ま と め

- 1) 平成27年度の入院症例は、920例であった。
- 2) 手術目的の入院が627例と最も多く以下急性炎症性疾患93例、急性感音性難聴88例、悪性腫瘍疾患56例、眩暈28例、末梢性顔面神経麻痺12例であった。
- 3) 急性炎症では急性扁桃炎や扁桃周囲膿瘍が49例と最も多かった。
- 4) 悪性腫瘍では下咽頭悪性腫瘍が最も多かった。
- 5) 手術件数は、全体で1,017件であった。その内訳は、中耳手術が324件、鼻副鼻腔手術が332件、咽頭手術が173件、頸部手術が127件、喉頭微細手術が42件であった。
- 6) 中耳手術を疾患別にみると、慢性滲出性中耳炎が132件と最も多く、真珠腫性中耳炎が104件、慢性化膿性中耳炎が66件であった。

## VI. 参考文献

- 1) 福入隆史, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 宮里麻鈴. 当科における平成15年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌36: 107-111. 2004
- 2) 呉奎真, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 福入隆史. 当科における平成16年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌37: 201-204. 2005
- 3) 羽嶋正明, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 呉奎真. 当科における平成17年度入院・手術症例の検

討。広島県立病院医誌38: 155-158. 2006

- 4) 尾野里奈, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 羽嶋正明. 当科における平成18年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌39: 162-165. 2007
- 5) 羽嶋正明, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 片桐佳明. 当科における平成19年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌40: 189-193. 2008
- 6) 片桐佳明, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 羽嶋正明. 当科における平成20年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌41: 115-119. 2009
- 7) 久保田和法, 福島典之, 平位知久, 中下陽介, 片桐佳明. 当科における平成21年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌42: 149-152. 2010
- 8) 久保田和法, 福島典之, 平位知久, 中下陽介, 片桐佳明. 当科における平成22年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌43: 125-129. 2011
- 9) 高原大輔, 福島典之, 平位知久, 中下陽介, 片桐佳明. 当科における平成23年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌44: 85-89. 2012
- 10) 岡林大, 福島典之, 平位知久, 宮原伸之, 高原大輔. 当科における平成24年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌45: 71-73. 2013
- 11) 有木雅彦, 福島典之, 平位知久, 宮原伸之, 吉賀綾子. 当科における平成25年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌46: 69-72. 2014
- 12) 有木雅彦, 福島典之, 平位知久, 宮原伸之, 吉賀綾子. 当科における平成26年度入院・手術症例の検討。広島県立病院医誌47: 71-76. 2015

## **An investigation of the number of hospitalized and surgical patients in the Department of Otolaryngology, Hiroshima Prefectural Hospital**

Saori Takahashi, Noriyuki Fukushima, Tomohisa Hirai, Keishin Go, Masahiko Ariki

### **Summary**

In the Department of Otorhinolaryngology, Head and Neck Surgery, Hiroshima Prefecture Hospital, an annual report regarding the number of hospitalized and surgical patients over the course of one year is issued. At this time, we are reporting on the number of hospitalized and surgical patients in our department for the year 2015 (from April 1, 2015 to March 31, 2016) in addition to some discussion.

The number of both hospitalized and surgical patients increased from last year, with the tendency to increase since the start of the investigation maintained. Regarding the characteristics of this year, the number of hospital treatments for sudden deafness significantly increased and this is believed due to the initiation of hyperbaric oxygen therapy for sudden deafness from April 2015. Moreover, with the establishment of a day surgery department, an increase was also seen in the number of day surgeries requiring general anesthesia which can be conducted in a short time, such as tympanostomy tube insertions. Furthermore, operational plans taking safety into consideration have been provided, including the introduction of a navigation system for nasal surgery and the use of a facial nerve stimulator for parotid gland surgery and a vocal cord stimulator for thyroid surgery.